

バナナを何分で食べますか？

眞鍋由比

わけあって バナナの皮を持ち歩く (檜崎進弘)

『大人になるまでに読みたい15歳の短歌・俳句・川柳 なやみと力』より。

どんなわけがあるのか、まったくわかりませんが、なんだかコミカルな気がしますね。バナナというフルーツの持つ力。それは他の追隨を許さない喜劇力を持っています。メロンでもみかんでもだめ。

『こんな夜更けにバナナかよ』という大宅荘一ノンフィクション賞受賞作もありました。難病で介護する相手のわがままと思える行動に振り回された著者がふと口に出していた言葉。それで思わずふふっと笑ってしまい、お互いの気持ちがほぐれた一瞬でした。これがりんごだとシリアスになってしまいます。

『バナナの皮はなぜすべるのか』という古今東西のバナナの皮すべりをマンガ、映画、文学作品、TV番組、ウェブサイトなど、さまざまなメディアで検証する本すらあります。愛されるバナナ。

なんと、マレー語にはPISAN ZABRAということばがあります。バナナを食べるときの所要時間だそうです。人それぞれで、またバナナによっても違うのに、いったいどうしてこんな言葉があるのか。歩いていればピサンザブラくらいで着くよ、とかピサンザブラぐらいゆでてください、とかこの写真ピサンザブラ程度見つめっていると別のものが見えてくるよとかいうふうに使うのかしら？想像がふくらみます。どういう状態でこの言葉は使われるのか。マレーという土地柄、バナナは日本よりも日常生活に溶け込んでいるでしょう。人食い鬼は昼間はバナナの木に隠れているという民話をこの本でも紹介しています。

『翻訳できない 世界のことば』 エラ・フランシス・サンダース著
創元社 2016

いろいろな国の感心する言い回しや推測するしかない言葉もあるのだけど、この本に日本語は4つ出てきます。外国人ってそういうことに感心してくれるんだと逆に気づかせてくれた本でした。それぞれの言語では特定の、翻訳できない言葉をつくるほど、大切にすることが違っていることが面白かった。作者のイラストもとても素適で、どんなひとがどういうところでどういう場面で使うのかしら、と思いをはせながらページをめくるのはとても心豊かな時でした。翻訳ってたいへんな作業で、こういう言葉があるから苦労させられるんだらうと思うけど、一つの言葉しか持たない人よりも豊かな視野を持てるのだなと感心しました。

とりあえず、マレーにいくことがあったらピサンザブラという言葉が聞こえないか、耳をダンボにしていいたいと思っています。

